

### 第3回京都市政策評価制度評議会摘録（平成15年度）

日時：平成15年11月6日（木曜日）午後5時30分～午後7時

場所：京都ロイヤルホテル2階 翠峰の間

#### 1 開会

#### 2 議事

【村松会長】

議事に入りたい。

前回の議論を踏まえ、政策評価制度の本格実施に向けて、評議会からの意見をまとめるわけだが、事務局にこれまでの経緯を踏まえて意見案をまとめていただいた。これを基に、更に議論していきたい。事務局から説明いただきたい。

【事務局】

資料の説明（略）

【村松会長】

資料「京都市政策評価制度について」の文章について質疑いただきたい。

市民満足度の名称は再検討の余地があるとの意見が書いてあるが、具体的に名称の案があれば挙げていただきたい。文章は直す部分と情報を提供する部分とが出てくるのではないかと思う。

【山岡委員】

満足、不満足というのが、結果的に恣意的に行ったもの、要するに作為的なものと不作為のものがあるとしても、受けた者が満足している、満足していないということは決まったことだと思う。新たに言葉を選ぶとすれば、思いつかないのだが。

市が行ったものであろうとなかろうと、結果的に満足するか満足しないかである。

【村松会長】

その場合、極端に言うとおよそ人生の満足度と似てきてしまうと思う。それぞれ施策の項目があるわけで、その項目ごとに満足度が示されているということは、仮に行政の貢献によるものでなくても良く、京都はそういうところだということか。

【山岡委員】

公共が何も手を入れていなくて、景色が良くて、鴨川がきれいで満足していればそれで良いのではないかという考え方である。

【村松会長】

市が行う政策評価の中の満足度であり、満足度と言っても100%ということはないので、より高める可能性がある尺度だと思う。そうすると、市がどれだけ更に加えることができるかという問題は残る。市の貢献による満足度という情報が出て、市が更に取組を行

うという話になるのではないか。

とりわけ満足度が高い場合には良いが、そうでない場合を考えると、市がどれだけ満足度を高めることができるかということがやはり市行政にとってはテーマではないか。

【山岡委員】

満足している場合は良い。不満足なときのみ後でもう一度考えると良いのではないか。満足している場合は、市が取組をしようとしまいと満足しており、不満足の場合のみ関係する。

【村松会長】

施策の項目ごとに満足度が出るわけである。その全体の情報について何と呼ぶかという問題で、不満足の場合などについてそういう議論の余地があるとすれば、やはり名称があったほうが良いのではないか。

【事務局】

市民の満足度ではなく、市政に対する満足度と捉えられるのではないかと危惧している。市だけでなく国や府、企業、あるいは歴史が貢献して今の状態になっているものを、市政のことだけだと誤解されると、そういったものを含めてアウトカムを取ろうとしたものが、名前に引きずられ、誤解を招いているのであれば残念だと思い、再検討ということはあるのではないのかと思っている。

【村松会長】

例えば、地域生活満足度はどうか。それには行政による貢献もあれば歴史による貢献も含まれると思う。

【山岡委員】

注釈を付けるのはどうか。市政に限らずと注釈をして、満足しているかを聞くと良いのではないか。

【新川副会長】

設問自体がそれに近い。

【山岡委員】

市政の恣意的な取組に関わるものと、自然の現象に関わるものとが一緒になって満足しているかという設問だと思う。

【事務局】

設問はそうにしており、かつそのような説明をしてきたつもりだが、市民が市政に対する満足度と思われているのであれば、事務局としても、市民にとっても不幸なことであり、誤解が解けるような名前があれば、そのほうが良いと考えている。

【村松会長】

満足度が高い場合、市の取組の結果ではないということもありうるのか。

【事務局】

それはそういうものとして理解していただいて良いと思う。それを前提として、P L A

N・D O・S E Eのサイクルの中で次に市として何をすべきか考えていく、それが評価の役割だと考えている。

村松会長の意見であったが、名称に生活が入れば、随分誤解は解けていく感じがする。

【村松会長】

資料の最後の項目で、「5 将来的な検討課題」の「将来的な」は少し先過ぎるので、「今後の」と直すのが良いのではないか。10年後に先送りするという意味ではなく、今からでも考えるが、来年以降ということであれば、「今後の」ではないか。

公共事業の再評価では、B／C（費用対効果）の議論があると思う。それは政策評価の参考にならないか。

【事務局】

公共事業も含めて事務事業評価では、コストを把握し、かつアウトカムというよりはアウトプットを見ていくものだと思う。政策評価と事務事業評価の役割を考えた場合に、村松会長の指摘については、どちらかというとな事務事業評価に近いかと思っている。

【村松会長】

何かそこを連動させて見ていくという視点はないのか。

【事務局】

連動させていくという意味で言えば、今でも参考として施策の評価の帳票に、施策に関連する事務事業を市民に分かりやすいように記載している。例えばその事務事業についての評価を見やすくするために、インターネットで公開している帳票をリンクさせることは、システムを工夫する必要があるが可能であると思う。

【山岡委員】

「究極のアウトカム」と「かなりアウトカム」の文章表現で、「究極のアウトカム」では、語尾の表現が言い切っている場合と、「と思う」と付けている場合とがある。一方「かなりアウトカム」では、語尾の表現が「と思う」と柔らかい。「と思う」は、「かなりアウトカム」の表現に合うのではないかと思う。

【事務局】

「そう思う」、「そう思わない」の選択肢に引っ張られたと思う。山岡委員の指摘のとおり言い切りにしたほうがより究極的な表現になるかと思う。

前回どのような設問が良いかと質問させていただき、今回はその議論のために資料を用意させていただいた。究極のアウトカムであれば、大体同じ政策の中ではほぼ似通った感じになってきてしまい、施策ごとに満足度調査をしている以上はもう少し施策ごとに色があっても良いのではないだろうかということで、また逆にアウトプットに近くすると、アウトカムを取ろうということで満足度調査をすることになったのに、それではどうかということで、両者の真ん中ぐらいの設問も考え、併せて3パターンの設問を例として挙げさせていただいた。大体どのレベルが良いかということを感じ覚的なものでも意見をいただければと思う。

【村松会長】

事務局の考え方としては「かなりアウトカム」あたりで良いという感覚があるのではないかな。

【事務局】

アウトカムを取るということと、どの施策が原因で良いのか悪いのかが分かるような設問ということでは、真ん中ぐらいが適当かと考えているが、委員の方々からの意見があればいただきたい。

【村松会長】

一度使った設問であり、失敗したという判定がなければ、とりあえず同じものを使ってみるのが普通は良い。それで一応市民は設問の意味が分かったことになる。分かったうえで回答が適当な分布になっているということであれば、良いのではないかな。何か失敗した質問があり、もう既に発見したことがあれば、それは変更すると良い。

【事務局】

ワーディングの問題に関しては、事務局で十分精査し、それを受けてこの評議会から満足度調査の設問を提案いただいたが、一つの質問の中で文章によっては二つのことを聞いてしまっているところがあり、それは直していきたいと思う。

【新川副会長】

一点目は資料の「施策の評価について」のところで、施策の評価の帳票には現在、客観指標、市民満足度調査、参考として事務事業の項目が上がっている。今後の課題かもしれないが、事務事業評価についても、施策評価の仕組の中に組み込んでいくよう検討いただきたい。施策の評価と事務事業評価とが、うまくつながらないだろうかと常々感じており、もちろん一対一で一つの施策に五、六本ぶら下がっている事業がきれいに連動して評価ができるという絵はなかなか描けないが、多少なりともそういう努力が必要ではないかと考えている。B/Cの話もあったが、事務事業評価ではかなりの程度多面的に客観的な数字を出す努力をしており、施策の評価の手がかりになる仕組は今後検討の価値があるのではないかと考えている。

二点目は市民満足度調査で、これは前回内藤委員と議論していたときに、この市民満足度調査の満足の中で、一体京都市行政の持ち分がどれぐらいあるのか、あるいは、そうではなくて世の中全体の動きというところが一体どのぐらいあるのか、あるいは国や府の役割のようところがどのぐらいあるのかがもう少し見えてくると、この満足度調査の結果についての読み方も変わってくるのではないかと感じている。なかなか区分けはしにくいですが、大ざっぱな形ででも市の役割分担、あるいは貢献度みたいな形で見えると、この満足度調査の読み方も違ってくるかもしれないと思っている。

次に同じく満足度で、これも前回の議論の中で出てきたポイントだが、満足度として出てきた中身を追跡的に設問で客観的、具体的に聞いてみる調査の仕方もあるかもしれないということを内藤委員と議論した。これも今後の課題かもしれないが、例えば「京都の学

習の機会がある」と言っているときに、満足の中身が一体どういう根拠によって満足しているのかということを追跡してみる試みが時にあっても良いのではないか、そういう確認をしていく作業も有効ではないかと考える。ただ、これは日常的な調査業務とか行政の中での検討になるかもしれないと思っている。

四点目は「政策評価の活用について」で、政策の評価は誰がどう活用するのか、施策の評価は誰がどう活用するのが、もう少し目に見えてくると良いと感じている。市長、局長クラスの方々、幹部職員の方々には政策の評価を中心に考えていただきたい、あるいは部課長クラスの方々には施策の評価を読んでいただきたいなど、具体的な使い道にももう少し踏み込んでも良いと感じている。例えば毎年度の予算要求、あるいは新しい事業を課内、局部内で検討するときの材料として位置付けられていくことが大事な気がしており、そういうところまで評価を使うことを評価の仕組として考えていくうえでも、積極的に言っても良いと感じている。

最後に、評価を色々な場面で、例えば予算システム、あるいは各局の企画推進ということで、活用することはもう既に聞いている。そのことについて、どれがどう反映されたのかを、反映された後に公にしていきたい。つまり、この評価に基づいてここをこう直した、あるいは新しい事業を始めたということをオープンにすることが、現行の評価を直したり、評価そのものの精度を上げたりすることにもつながる。単に評価をした説明責任だけではなく、その後の管理システムサイクル、PDCAサイクルそのものをきちっと回し、是非とも反映結果のレポートをオープンにしていきたい。

#### 【事務局】

評価の反映結果については公表できないことはない。ただ、技術的に例えば評価がこうなったから、事業費が倍になったと単純にいくものではなく、工夫して見せるようにしなければならないと思う。どこまで評価の中で対応するかはともかくとして、市全体として流れの中でどうなったかを言っていくことは大事なことなので、考えていきたい。

評価の活用について、具体的に誰がどう使うかだが、現在それがない中でもきっちり活用しており、それを予定調和的に示すのもどうかと思う。

事務事業評価との連携について、時期的な問題がある。各局が評価作業を行うので、二つの作業を同時に行うとなると相当な事務量になる。そこをなるべくシステマチックに機械的に行い、負担がかからないようにしなければならないが、うまく連動できれば良いと思う。ただ、膨大なシステムを組んで評価を行うのはどうかと思う。現在でも事務事業評価の調書の中に上位の政策・施策を明らかにする工夫はしており、結果を発表したときに相互に関連して市民に見ていただけるようになると思う。

#### 【村松会長】

評価をどう使ったかの整理だが、一挙に公表するというのではなくて、そういうことが効果ある制度だということを内外に示すためにどういう方法があるかを検討していきたい。うまくいきそうもないのであれば、そのことについて聞きたい。面倒だろうし、

全部網羅的にはとても書けないはずで、また全部言葉になるかどうかという問題もあるだろうが、そこまでできるときちっとすると感じているので、検討していただきたい。

資料の「施策の評価について」の総合評価で、施策ごとに客観指標評価と市民満足度評価のどちらにウエートを置くかを説明したうえでウエート付けを行うとしている。設問ごとにウエートを変えることは、それぞれ説明コメントがあるから良いとしても、うまくいくかなという感じはある。全部が同じウエートだと市民にとっては分かりやすいが、施策ごとに違っていると、何か都合の良い組み合わせを作っているのではないかという疑問が出てくると思う。仮に説明を受ければ、納得するとしても、その説明を求める人が少ないだけに、恣意的だという印象で終わってしまわないかという不安は感じる。

【木田委員】

今のところに関連して、議論が後戻りするが、無理して総合評価をするべきかどうかを疑問に感じる。客観指標評価はこうなっているけど市民満足度評価ではこうだと言うほうが何か素直な気もする。

【村松会長】

そうかもしれない。しかし、総合的に見てA、B、C、D、Eでまとめると、市長のように忙しい人にとっては分かりやすいので、そういうニーズはあるかもしれないと思う。

【木田委員】

下手するとミスリードをするような気もする。

【村松会長】

意見にはどう盛り込むべきか。「ウエートを置いて評価しても良い。いずれかにウエートを置いた評価をするべきか、その方法は検討する。」でどうか。

【事務局】

きっちりどういう説明をするべきかこれから考えていかなければならないので、それが納得を得られるような説明になるかどうかも含め、指摘のとおり検討するということにしたい。

【村松会長】

副市長や局長の感覚はどうか。分けて使ったほうが良いのか、それとも一緒にしたほうが良いのか。

【事務局】

総合評価でAならA、BならBと書いてあるほうが確かに扱いやすい。しかし、それが中身として逆にミスリードされるようなことになると困るので、一概には言いにくい。ただ、政策評価について議会などで議論するときに、一般的には客観指標評価が良くても市民満足度評価が低いものはやはり良くないという捉え方しかなくなっていくと思う。更に厳密に議論すれば、市民満足度につながらない数値目標というものがあるのかということになり、市民満足度という調査項目がある限りは、やはりその市民満足度がどのレベルにあるかということが政策を議論するときにはどうしても一番焦点になるのではないかと思います。

う。議会を相手に色々と議論するというレベルになると、やはり市民満足度が一番政策評価の中心にならざるを得ないという感じを持っている。

市民満足度について、委員の方々に質問をさせていただくが、満足度と充足度というのはどう違うのか。

【村松会長】

人によって違うと思うが、充足というほうが客観度が高いのではないかな。満足というのは全く主観の問題だと言葉の上では理解するのではないかな。

【事務局】

満足度を充足度に変えると何か違うことが起こるか。

【村松会長】

充足度のほうが行政の貢献を問うていると思う。

【山岡委員】

例えば、劇場の椅子を100席充足させても、椅子の造りが悪いと満足しない場合がある。客観的にこちら側が充足していると思っているが、主観的に満足していないという場合、量や容積などは関係していない。

【事務局】

客観指標ではなく、市民満足度調査についてである。

【村松会長】

例えば「どの程度充足されていると思うか」という感じになるのか。

【事務局】

設問の仕方は変えない。市民満足度という言葉自体を変えるのはどうかということである。

【村松会長】

「と思う」と言っているだけであり、「充足されていると思うか」、「満足していると思うか」と聞いているわけでもないのです、これをどう呼ぶかの問題である。だから充足度調査という名称もありうる。充足度調査のほうが究極でないから良いかもしれないということはある。

【事務局】

政策評価がどのように活用されているかを見えるようにしていくという問題だが、一番手近なところ、関係の深いところ言えば、予算にどのように反映されたのかということが表れると思う。これは、政策評価そのものがどうなっているかということを説明するというよりも、予算の編成過程や内容をどれだけしっかりこれから説明していくようになるかということにかなり多く関わっているように思う。単に一覧性があるというよりも、市民に対する説明も新しい予算項目とか、あるいは重要な事務事業について説明をしていくわけで、なぜそういう新規の予算を組むのか、なぜそれが重要な事務事業であるのか、そういうことを説明していくときに説明の中身として、当然のことながらこの政策評価でこ

ういう評価を受けているからこのような位置付けをしたい、このような増額をしたい、逆の場合もありうるが、政策評価はむしろそういう目的であってしかるべきだと思う。そのため予算が使われている中身を市民に色々な機会にできるだけ公開していくことがまず大事だと思っている。これから予算を随時公開していこうと思っている。

【村松会長】

政策評価によって説明力が増していく。

【事務局】

先ほどの木田委員の指摘についてだが、総合評価も非常に有効だと思う。総合評価だけだとミスリードにもなるかもしれないが、客観指標評価と市民満足度評価があれば全体も見るが、市民満足度がどうか、客観指標はどうなっているか、必ずこの二つを見ないと次にどういう施策を打っていくべきかを考えられない。そういう意味で重要な要素としてこの二つは必要だが、それを反映した総合評価も重要かと思う。前回質問したときに、村松会長から、施策によっては市民満足度評価が低くても客観指標評価のほうが重要である場合もあり、その場合はそれで評価すべきではないかという意見をいただいた。施策によって客観指標評価が重要になるもの、あるいは市民満足度評価で決定という施策もあると思うので、それを加味した総合評価が全体としての評価としてあると、色々な場面で非常に使いやすいということで、結論としてこの両方があったほうが政策評価としては生きるという感じを受けている。

市民満足度について、生活が入ると随分違うと感じた。なぜ誤解があるかと言えば、市民満足度というのは市民の満足度という言葉だが、市民の何々に対する満足度というその何々が抜けているから、こういう設問のために、市の施策に対する満足であると考え市民もいると思う。そのため何々に対する満足という言葉が正確に入れば誤解が解けると思うので、生活という言葉を入れるとかなり全体として当てはまるかと思う。何々に対するものをどういう言葉で入れるか、地域生活が良いのか単なる生活が良いのかを工夫したほうが良いと感じた。

【山岡委員】

評価結果を見ていると、ほとんど市が少し遠慮している評価になっている。客観指標評価がAであっても市民満足度評価がBであればB、CであればCと、ほとんど市民満足度評価の結果に引っ張られている。

【事務局】

それが基本だと思う。

【山岡委員】

姿勢としては非常に正しいと思う。

【金井委員】

市民満足度の名称のことだが、生活を入れることは非常に良いと思う。地域生活となると小さなブロックとも取れるので、市民生活、京都市民としての生活をしている人々の満



足が良いと思う。充足となると、「どのぐらい充足されているか」との設問になると思うので、市民生活満足度と「生活」を入れたほうが良いと思う。

それから総合評価について、客観的な指標による客観指標評価があり、それと主観的な市民満足度評価と両方合わせて総合評価するほうが良いと思う。

【村松会長】

例えば客観指標評価Aと市民満足度評価Cで総合評価Bという表示も一応あり、内訳が書いてあれば良いという意見か。

【金井委員】

はい。それから、もし不満足な項目が多くあった場合には、別欄にコメントを書けるようにしておくと、意見が多く出ると次の施策の企画に用いることができ、新しい企画にも役に立つのではないかと思いますし、予算の執行のときにも役に立つと思う。そういう意見を記入できる欄を設けるのが良いと思う。

【山岡委員】

総合評価は村松会長が書くのか、それとも事務局が書くのか。

【村松会長】

事務局が評価する。ここでは評議会の意見を提出するわけで、実際の評価は、ルールが決まれば事務局が行う。

【山岡委員】

事務局は遠慮して評価をしている。

【村松会長】

それはルールをはっきりさせれば遠慮しなくなる。

【事務局】

村松会長の意見のとおりだと思う。山岡委員の指摘のように評価が控え目と取られるかもしれないが、客観指標評価Aと市民満足度評価Bで総合評価Bとか、AとCでBにしたというのは、AとCでAにすると恣意的に評価したと言われることを心配したためである。ただ、実際に評価する中で疑問に思うこともあったので、前回この評議会場で質問し、そのときこういった意見をいただいたと思ったので、このようにまとめて事務局案という形にしたわけである。

【山岡委員】

例えば市民満足度の設問で極めて不満足となった場合、これは設問の設定が悪くてこうなったということについて言い訳を書くわけにいかないということか。

【事務局】

そういう言い訳をしなければならないような設問にはしたくないと思っている。

【村松会長】

その場合には設問をもっとよくするという努力になる。

【新川副会長】

政策の評価も施策の評価も仕組としてはかなりの負担が市の職員にかかっている。事務事業評価も大変だと思うが、評価の作業そのものをもっと軽減するような評価の仕方を考えないといけない。ただ、そうは言われてもなかなかどの項目を落とすというわけにもいかないということがある。書式ができ上がり、後は埋めていくだけというようなところが仮にあるとすると、ここに埋める数字、あるいは言葉が市の業務の色々な場所で共通に使える、そういう仕組までいずれは持っていかなければならないと感じている。

例えば事務事業評価の帳票で、一番トップのところにはこの施策の評価結果が並んでいるということだけでもそこは共通ということになる。あるいは、個人的には各局が予算調書をつくるときに、こういう情報をむしろ予算査定時の基本的なデータと考えていただき、予算当局はこの程度の資料ではとても査定できないと言うことは目に見えているが、逆にこれをベースの情報として予算を考える。更に言えば、幹部職員も含めて職員の人事考課、人事評価をするときに、その情報としてもこれをベースに考えられないかということまで含めて、これは将来課題になるが、どこからそういうデータを共通に利用できるような枠組を考えていく、それと併せて評価作業をできるだけ軽くすることを是非とも検討いただきたい。

【村松会長】

評価を実施すると、どちらかと言うと作業負担は重くなる。ただ、評価を内部のマネジメントにも使えるほうが良いので、直ちにできるかどうか分からないが、研究すべきである。

それから参考1の客観指標で、Aは市民満足度評価だけで評価しているというもの、Bは客観指標に準ずる指標のみで評価しているもの、Cは市民満足度評価と客観指標に準ずる指標のみで評価しているもの、これについて準と書いてある指標を格上げできるか、あるいはもっと他に適切な指標があるかという質問がある。これはどうか。

偏見かもしれないが、公共交通の利用割合の増加度は良い指標だと思う。

【事務局】

事務局としてもそう思いつつも、それをどれだけ数値に表せるかというのは個々の施策を一番熟知している原局に最終的に判断を任せている。

【村松会長】

保育所の待機児童数も重要な指標だと思うがどうか。

【事務局】

保育所の待機児童数については、子育て支援の施策では主要な指標だが、男女共同参画の施策については、少し補足的な取扱にしている。

【村松会長】

世の中の議論ではストレートに関連付けて議論しているのではないか。

【事務局】

多分そうかと思う。原局では女性が働いている割合など、もっと高度な、もっとストレ

ートな指標があると考え、客観指標に準ずる指標としている。指摘のとおり社会的にもかなり重要だということになれば、格上げについて原局と相談していきたい。

【新川副会長】

準の指標を議論するときに、参考1で特に準指標のみのところはやはり主の指標にしたほうが良いということでこれを作っていたと理解して良いのか。

【村松会長】

はい。そのときに一つだけ上げるのも変なので、四つあれば四つをまとめて見れば安定性が高まると思う。

【新川副会長】

ここでリストアップしていただいたものに準指標のみのものがたくさん出ているので、これはそれぞれの原局の考えとは思いますが、実質的にこれをもう主の指標と考えざるを得ないのではないかと。

ただ、もちろんどれを選ぶか、あるいは幾つ選ぶのかということについてはまたそれぞれ考えはあると思うが、こういう準指標については基本的に主指標にしていくという方向で考えると良いと思うがどうか。

【村松会長】

原局は色々な考慮があって、準指標と考えていると思う。そのときに評価当局は、主指標への格上げについて提案しても良いのか。

【事務局】

実際評価をしていく中で、こういう準ずる指標でさえ設定できていなかったところもあり、本当に施策の中身を表現しているとは思えない、ストレートに表せているとは思えない指標であっても、準指標として設定してきた。ただ、その中でも良い指標もあるのではないかとと思うので、委員の方々から指摘をいただければ、原局に対してもお墨つきがついたということと言えるかと思う。また主要指標を設定している施策でも、その中に混在している準指標について、主要指標にしても良いという意見があれば、今日この場でなくても結構なので、意見をいただければと思う。

【村松会長】

準の格上げよりも、市民満足度評価しかない施策の客観指標を探すことがとりあえず重要である。人権などは非常に難しく、数量化すること自体を嫌だと言う人もいるかもしれないが、指標を設定できる可能性はある。

客観指標については、よく考えれば意見が言えるかもしれない。事務局から指標の相談があり、本当に良い指標だと思えば、オーソライゼーションはできるかと思う。事務局で考えがあればこちらに問いかけていただければ良い。気が付けばこちらでも連絡するという事でどうか。

【木田委員】

市民満足度評価のみで評価しているAについては、客観指標を探したほうが良いのでは

ないかとの意見は全くその通りだと思う。BやCについても主要な客観指標を探していくという考えになると思うがどうか。

【村松会長】

客観指標に準ずる指標だけではなく、もし良い指標があれば更に良いものを探し、その中でやはり世間一般で格上げしたレベルで指標と考えているものがあれば、それは格上げして良いと思う。常識の問題だと思う。

いずれにしても施策に100%同一というか、それを表す指標があるとは思えない。どれだけ近接しているかということなので、安定して使えるものがあるという判断があれば一度使ってみると良いと思う。

本日の議題はこれで終了とする。

3 あいさつ

4 閉会

【事務局】

この後の処理については会長に一任いただき、会長の修正を付け加えていただいたものを評議会の意見とさせていただく。

-----

第3回京都市政策評価制度評議会・出席者

村松岐夫(むらまつみちお) 学習院大学法学部教授・京都大学名誉教授

新川達郎(にいかわたつろう) 同志社大学大学院総合政策科学研究科教授

金井秀子(かないひでこ) 京都文教短期大学教授・京都教育大学名誉教授

木田喜代江(きだきよえ) 公認会計士

山岡景一郎(やまおかけいいちろう) 経営コンサルタント